

【要旨】ツヴィングリの和訳聖書：ヴァチカン図書館蔵バレット写本福音書朗読集

パトリック・シュウェマー

ヴァチカン図書館蔵バレット写本の福音朗読集は、同写本の大半を占めているにもかかわらず、ほぼ未研究のままである。その大きな原因の一つは、原典が定まらないからである。本発表では、バレットの福音書朗読が和訳されたラテン語聖書を 1584 年サラマンカ版『双訳聖書』と同定した。

その根拠としては、この聖書に付録されている朗読表や索引がバレット写本の構造に影響を及ぼしていることが明らかだが、何よりもバレット写本の日本語が『双訳聖書』のチューリヒ的部分を反映しているという点が重要な手がかりとなっている。というのは、バレット写本の福音書がツヴィングリ周辺の学者が翻訳した 1531 年のドイツ語聖書と、その影響下で編集された 1543 年のラテン語聖書と多くの異文を共有しているからである。しかし、どのようにしてプロテスタント系統の改訳聖書が、イベリア両国の庇護のもとで行われた日本宣教活動で使用されることになったのであろうか。

事実、雪嶋氏の研究対象であったゲスナーが、1530 年代にパリに滞在していた頃からエティエンヌがフランス国王フランソワ一世に注文を受け、1545 年に初版を出版した『双訳聖書』が鍵となっている。この聖書はそもそも流布本ラテン語聖書を「古訳」とし、チューリヒ版『ラテン語聖書』を「新訳」として平衡に印刷したものであり、御抱え学者ヴァタブルのものとされる注釈もエティエンヌの発想により付されたので「ヴァタブル聖書」とも呼ばれている。ただし、新しい学問と古い学問を和解させようとしたこの聖書は、その後間もなくしてパリ大学神学部により異端の容疑をかけられたこともあり、日本で使われた確率は低い。

むしろ、『双訳聖書』を通してチューリヒの聖書学を日本に伝えたのは、1580 年にイベリア両国王となったフェリペ二世なのである。1572 年の『多言語聖書』では、原文を探ることによってアブラハムの三宗教を質するという発想で既に聖書出版へ意欲を示していたフェリペだが、次はおそらく宗教改革時代の氾濫する解釈に片をつけようと『双訳聖書』に着手した。ルイス・デ＝レオンを含め、サラマンカ大学神学部に「誤謬を直し」てもらい、異端審問の認可状を付けてポルトナリーに豪華に出版させた。

これは天正遣欧使節がイタリアから戻り、二度目のイベリア半島巡りをしていたときに当たる。なお、フェリペ二世は日本宣教活動の熱心な庇護者であったため、(日本イエズス会の蔵書目録はあいにく追放後まで伝存していないが)オルテリウス『地球舞台』に関して推測されているのと同様に贈答品としてあげられたか、あるいは直接日本へ送られた確率が極めて高い。このようにして、チューリヒを一つの起点とし、ヨーロッパ全域に亘る解釈ネットワークを代表する『双訳聖書』は、現存最古の和訳聖書の原典となった、ということになる。

このように原典が特定されると、バレット写本福音書朗読集の文体を厳密に分析できるようになる。したがって、本発表の最後では、翻訳方法を同時代の国文学、特に幸若舞曲などの語り物芸能、それから漢籍の訓釈という二つの文脈において位置づけた。